

## 第17回国際日本学シンポジウム「日本化する法華経」 【総括】

浅田 徹\*

本シンポジウムは比較日本学教育研究センターと、国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター、日本学術振興会学術システム研究センターの共催で行われた。

本センターがシンポジウムで毎年発信してきた「国際日本学」の開拓というテーマと、国文学研究資料館を中心とする全国20の大学（お茶の水女子大学もその拠点校の一つ）・海外の日本学研究拠点が共同して行う文部科学省大規模プロジェクト「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク」の活動には十分な接点があり、イベントの共催に至ったものである。日本学術振興会からもその趣旨に対するご理解とご支援を頂くことができた。

「日本化する法華経」という総合テーマは、「日本語の歴史的典籍」とは何か、という問いかけから発している。法華経を「日本のものとなった」典籍と見ること、どういう問題が開拓できるかということ、国際的・学際的な研究者の協力によって探っていこうという試みである。

第1日（7月4日）は、本学の室伏学長、共催元の国文学研究資料館の今西祐一郎館長の挨拶により開会、パネルAとして「日本に融け込む『法華経』」のタイトルで4人の研究者にご報告頂いた。

・石井公成氏（駒澤大学）『『法華経』と芸能の結びつき ―聖徳太子伝・琵琶法師・延年―』

・ジャン＝ノエル・ロベール氏（コレージュ・

ド・フランス）「和漢両語の媒介者としての法華経和歌」

・グエン・ティ・オワイン氏（ベトナム社会科学院漢喃研究所）「日本とベトナムにおける法華経信仰に付いて ―古典から探す」

・馬駿氏（対外経済貿易大学）『『本朝法華験記』の比較文学的研究 ―表現の和化を中心に』

石井氏は法華経が芸能などを通じてどれほど深く日本に根付いていたかを、様々な史料から指摘なさった。ロベール氏は、漢訳仏典によって入ってきた信仰が、やまとことばの釈教歌という形で結晶していくことの意義を語られた。

オワイン氏はベトナムでの法華経享受（それは日本と同じく漢訳仏典による）の歴史的経緯について説明され、日本での享受との違いを指摘なさった。馬氏は、『法華験記』の表現を詳細に分析し、従来知られていたよりももっと多くの法華経の文言が影響していることを報告なさった。

ディスカッション終了後の交流会にも多くの来場者を得た。

第2日（7月5日）は古瀬センター長の挨拶により開始、午前の部では原口志津子氏（富山県立大学）の講演「富山市八尾町本法寺蔵『法華経曼荼羅図』について」が行われた。鎌倉時代に遡る大画面法華経絵の優品である。描き込まれた多くの場面から読みとれる情報について興味深い報告をして下さった。

午後の部、パネルB「日本の典籍としての『法

\*お茶の水女子大学教授

華経』は国内の研究者による学際的なセッションである。

- ・浅田「書写と読誦 ―法華経の文字と声―」
- ・橋本貴朗氏（國學院大學）「能書が経典を書写するとき」
- ・肥爪周二氏（東京大学）「日本漢字音史から見た法華経」
- ・柴佳世乃氏（千葉大学）「法華経と読経道 ―芸道としての法華経読誦―」

浅田は経典が音声・表記ともに神聖なものとして、日本人が理解しがたくともそのまま保存されようとするということについて述べた。

橋本氏は書道史の立場から、経典の書写に能書家があたることについて、史料と遺品の両面からお話し下さった。肥爪氏は法華経読誦に用いられた漢字音（呉音）が、実際にはどのようなものとして構築されていたかを報告なさった。柴氏は、芸道としての読経道（経典に節を付けて読み上げる技芸）の形成と実態について、史料をもとにお話し下さった。

2日間を通して、全体の進行、二つのパネルのディスカッションの司会等はすべて浅田が行った。

天候には恵まれなかったものの、2日間合わせて100人を超える来場者（関係者を除く）があった。各パネルのディスカッションでは、フロアからの質問を質問用紙形式で募ったが、これも多くのコメントが寄せられた。来場者向けアンケートでは、イベント全体について肯定的なコメントが圧倒的で、主催者側としては喜ばしいことであった。

ご講演・ご報告下さった方々に、この場を借りて改めて心より御礼申し上げます。運営事務に当たられたセンターAA（原山絵美子・保田那々子両氏）、国文学研究資料館古典籍共同研究事業センターの神谷様にも御礼申し上げます。

イベント広報のため、日本文学・芸能史・思想

関係などいくつかの学会の例会・大会会場にチラシを置かせて頂いた。チラシを見てイベントを知ったという方も多く、ご厚意に感謝申し上げます。

本シンポジウムの内容は、当『年報』に活字化する通常の形態ではなく、さらに多くの研究者からの執筆を得て、学術書出版社より書籍形態で刊行する予定である（勉誠出版『アジア遊学』シリーズの一冊として。平成28年度刊行予定）。そのため、『年報』には各報告・講演の要旨のみを掲載させて頂くことにした。この点、ご了解頂きたい。

本シンポジウムは、前述のプロジェクト「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク」の「拠点主導共同研究」としても位置づけられている。そのため、本センターのみでなく、国文学研究資料館のホームページ内に設けられている、同プロジェクトの活動報告にも掲載されている。他の拠点校の活動、各種共同研究と合わせ、人文系としては異例の大規模プロジェクト（平成27年度が実質的なスタート）の順調な進展を期待する。

## 『法華経』と芸能の結びつき

— 聖徳太子伝・琵琶法師・延年 —  
(要旨)

石井 公成\*

『法華経』は、もともと芸能的な性格を持っていた。辛嶋静志が指摘するように、譬喩品の火宅の譬喩では、jñāna (智慧) と yāna (乗り物) が中期インド語ではともに jāna であることを利用した言葉遊びが用いられている。

中国では、初唐には盲人が琵琶を弾きつつ『法華経』を読誦していた例がある。新羅でも同時期に琵琶居士と呼ばれる仏教系芸能者が存在していたため、彼らも『法華経』を琵琶の伴奏で読誦したことが想像される。

隋から唐の初期にかけて成立したと思われる仏教色が強い笑話集、『啓顔録』には、『法華経』の文句を用いた駄洒落が見えており、広く親しまれていた『法華経』は、冗談の素材でもあったことが知られる。

日本でも、『法華経』は早くから受容されており、『日本書紀』では蘇我氏と物部氏の合戦場面において、『法華経』の文句が利用されているため、寺院の縁起譚の一部として戦記を含む太子伝が物語られていた可能性があり、後には琵琶法師が関与した可能性もある。

受容が進むにつれ、日本化も進んでいった。平安初期の『東大寺諷誦文稿』が、「春細雨降時<sub>ル</sub> 如万草木生長<sub>ル</sub> 下平等一味<sub>ル</sub> 法細雨 除滅无邊 乃災患」と述べているのは、雨季になって激しく降るインドの雨を日本の柔らかな春雨として受容したことを示しており、また衆生の機根を論じた薬草喩品の喩えが除災の呪文のように受け止めら

れていたことが分かる。

『啓顔録』同様、いやそれ以上に『法華経』を冗談のネタとして使うことが盛んであって、恋の歌でも盛んに用いられた。小野小町への返歌とされる僧正遍昭の「世をそむく苔の衣はたゞ一重貸さねば疎しいざ二人寝ん」はその代表例であり、『法華経』の複数の個所の文句を用いている。

注目されるのは、永享12年(1440)9月の『管弦講并延年日記』「宝塔涌出事」によれば、興福寺の延年において、『法華経』に基づく多宝塔出現のページントが展開され、それが「鬼畜」を鎮撫する祝言となっていることだ。つまり、僧侶が釈尊に扮して登場し、今から一乗を説くため集まるよう告げると、龍神や動物のかぶり物をつけた者たちが多く参集し、彼らに釈尊が、『法華経』が説かれる所には宝塔が出現すると説くと、作り物の宝塔が出現して戸が開く。そこで、大衆説菩薩が、「鬼畜人天、悉く記別に預かり了んぬ」と述べ、舞楽が始まる。

「一切衆生」と言わず「鬼畜」を最初に出しているのは、すべてのものが将来成仏するという預言を与えることにより、害をなす邪鬼・悪獣を鎮撫しようとするものと言えよう。威嚇によって邪鬼を追い出す中国の追儼と違い、延喜式の追儼では慰撫したうえで出ていくよう求めていたが、寺院での延年では、一切成仏の授記を与えて邪悪な存在を鎮撫しようとしたのであって、『法華経』は祝言の役割を果たすに至ったのである。

\* 駒澤大学教授

## 和漢両語間の媒介者としての『法華経』法文歌 (要旨)

ジャン＝ノエル・ロベール\*

『法華経』を対象とする法文歌が和歌の格別のジャンルだけでなく、仏教教義に造詣の深かった中世の歌人が仏教の教えを日本語で表現すると同時に、中国語（漢語）と日本語（和語）との関係を密接に結ぶ枠を作る道具として使った事実を明らかにしようとする。この役割を果たした和歌は、漢訳仏典が未だ組織的に日本語に翻訳されなかった時代に、和語を聖語にするという重要な結果をも齎したのである。日本の神々と仏・菩薩を習合する「本地垂迹」説の論理に基づいて日本語は二重の宗教的性格を帯びるようになった。日本の神々に創造された和歌はインド・中国の仏教の教理も伝える媒介になったわけである。

序文・歌論などでは、狂言綺語とされていた和歌をつくる事を正当化するため、白居易の有名な文がしばしば引用される：「願以今生世俗文字之業、狂言綺語之誤、翻為当来世世、讚仏乗之因転法輪之縁」（洛中集記）。鎌倉初期の歌人であった慈円は、「白氏文集」をもとにして詠んだ百首集の跋文で同じ文を引用するが、そこで「翻」の字を「翻訳」の意味で理解することが著しくて、中国の漢字・漢詩を日本の歌に「ひるがえす」詩歌的活動を指すのである。漢詩を「和化」する、すなわち「やわらげる」という翻訳過程そのものは直接に「本地垂迹」説に繋がり、その別名である「和光同塵」の論理を文字通りに具体化するものである。

慈円より二世紀も早く、平安中期の藤原公任は、

言語的媒介によって中国・日本両文化の融合を完成させる手段として極めて重大であった「和漢朗詠集」の編集者として、白居易の同じ文を引用している。

公任の自家集に収録された法華経二十八品歌が示す通り、当時の数多い歌人と同様に、彼の「法華経」に対する関心と知識は大きかった。ゆえに「朗詠集」の跋文とも見られる「白」の部を除けば、「無常」部は集の最後部と見なすべくして、この部の最終歌も集の結論とも言うべき歌で格別な意味を持っている。それは天台宗僧侶であった僧正遍照の歌で、表面的に釈教歌を象るものである：「末の露 本の雫や 世の中の 遅れ先立つ ためしなるらん」。一般の解説では、この歌が「法華経」方便品第二の「十如是」の文を元とする釈教歌の形を取ったものであるという重大な事実は無視されるようであるが、十如是の最後である「本末究竟等」の光のもとで、「本」である漢語と、「末」である和語は融合されて、完全に平等になるのである。

\* コレージュ・ド・フランス教授

# 日本とベトナムにおける法華経信仰について

## —古典から探す (要旨)

グエン・ティ・オワイン\*

中国を始め、漢文文化圏に属している日本、ベトナム、朝鮮半島では、古代から『法華経』を信仰している。日本では天台宗で『法華経』を根本経典として重視したため、『法華経』が大きな影響力をもっていた。日本では、『日本書紀』には606年に聖徳太子が法華経を講じたとの記事が見られる。また、9世紀の『日本霊異記』、12世紀の『今昔物語集』には、法華経霊験譚が多く見られ、日本では『法華経』を重要視していたことが分かる。

ベトナムの前近代における仏教文献の中には、『日本霊異記』や『今昔物語集』と同じような法華経霊験説話集はない。しかし、『法華経』と『法華経』に関する資料が現存している。

ベトナムでは『法華経』がはじめて出現するのは三世紀ぐらいである。李・陳朝の時代(1009-1407)に至ると、仏教は国教として尊崇されていた。当時、優秀な僧侶を選挙するために『法華経』、『般若経』を試験問題として科挙が行なわれていた。仏教経典が初めて印刷され、全国に公布されたのは1298年である。陳朝末期から仏教が衰えたが、仏教は一つの地下水脈のように黎朝中期(17世紀)から信仰が高まった。仏教経典を注解したり、印刷したりするほか、一般的なベトナム人のためにベトナム語(喃字)に翻訳した『妙法蓮華経』がまだ残っている。阮朝(1802-1945)になると、儒教が最も尊重されるようになったが、歌謡として書かれた『法華経』は覚えやすく、伝えやすいため、伝統歌謡である六

字・八字の形に翻訳したベトナム語の『法華国語経』もある。これはベトナムにおける法華経信仰の貴重な資料である。

フランスの極東学院(E.F.E.O)は、1901年にベトナムに創設されて以来、『法華経』を初めとする多くの仏教経典や関連資料を収集していた。ガスパルドン(E.Gaspardone)が編纂した目録によると、95もの『法華経』関係の文献があげられている。

筆者は、これまで研究してきた『日本霊異記』と『今昔物語集』における「観音信仰」と、ベトナムの前近代における「観音信仰」を比較して、両国の法華経信仰の特質を明らかにした。両国の説話には、夢の中で観音を見た人物が登場するが、分析すると両国の人物は社会的位置が同様ではない。しかし、仏教に対する信仰心をもって、仏教を広めさせ発展させるため、二人が夢の中で観音を見たのが観音の褒美であったことは共通している。

まとめると、ベトナムでも日本と同じく『法華経』を信仰していたことは、古典から確認できる。大量の『法華経』と法華信仰を示す書物が残っており、これはベトナムの仏教史、『法華経』の伝来・発展の歴史について研究するうえで貴重な資料である。『法華経』はその魅力により、ベトナムと日本の民衆にとって、理解し、受容しやすい経典であったことは言うまでもない。ベトナムに現存する多数の『法華経』と法華関連文献を深く研究し、日本と比較することにより、両国の法華経信仰がより明らかになることを期待している。

\*ベトナム社会科学院漢喃研究所准教授

# 『本朝法華驗記』の比較文学研究

## ——表現の和化を中心に (要旨)

馬 駿\*

### 一、はじめに

本報告は驗記における表現の和化問題の展開に先立ち、比較文学の立場から、実証的な方法で驗記と『法華経』及び関連の仏典との出典問題を明らかにしたい。

### 二、驗記と『法華経』の経文

驗記では『法華経』の経文の引用法は直接と間接の二つがある。経文を直接に引用するに、七通りの文型を用いる。うち、経文引用の際、異文の現象が生じるが、それを初めて指摘して版本学の解釈を試みる。直接の引用法より間接の引用法に関する研究のほうが立ち遅れている。驗記では『法華経』の用語が随所にちりばめられているが、それが数多く見逃されているからである。

### 三、驗記と智顛説「法華三大部」

第一には、驗記と法華玄義との受容関係について、第88話持経者蓮昭法師には「其病平愈、身心安楽」の文言がある。四字句「身心安楽」は法華玄義に「遇光開法者、三途中身心安楽、人中癡残者差」と見え、妙法を聞けば、三途においても心身とも安楽で、病弱などが回復する、という。第二には、驗記と法華文句との受容関係について、第24話頼真法師には「宿習猶残、余報未尽、唵常嚧」の記載が見られる。頼真法師のこの宿業の話は華経文句巻二に「昔五百世曾為牛王、牛若食後、恒事虚哨。余報未夷、唵常嚧」という憍梵波提の故事を下敷きにするものと指摘したい。驗記では法華文句を直接の出典とする故事はもう一例ある。第49話金峰山蘄岳良算聖に「悲哉、智恵不及雪山寒鳥、布施不如赤目大魚」とあり、法華文句巻一「序品」に「仏昔於飢世、化為赤目大魚、閉氣不喘示為死相、木工五人先斧斫魚肉」と見え

る。第三には、驗記と『摩訶止観』との受容関係について、第29話定法寺別当法師では「形雖似僧、所行如俗。專貪瞋癡、行殺盜婬妄飲酒～五塵六欲、貪染無厭、摂受惡業、如海吞流、如火焚薪」とあり、『摩訶止観』巻一に「若其心念念貪瞋痴、摂之不還拔之不出。～若其心念念欲多眷属、如海吞流、如火焚薪」とあるのに拠る。

### 四、驗記と『止観輔行伝弘決』『弘賛法華伝』『法華伝記』

まず、驗記と止観輔行との表現の関わりについて、第73話浄尊法師に「分段依身、必資衣食」と見え、止観輔行巻四に「内禁雖嚴必資衣食」とある。次には、驗記と『弘賛法華伝』との表現の関わりについて、第16話愛太子山鷲峰仁鏡聖に「欲汲谷水、瓶水自満」とあり、『弘賛法華伝』巻六に初出例として「或瓶水自満、或地恒掃浄」とある。第三には、驗記と『法華伝記』との表現の関わりについて、驗記の数少なからぬ表現を四字句・句式・発想といった面から、僧祥独創の用法や孤例に求めつつ、二者の並ならぬ受容関係を確実に捉えていく。

### 五、終わりに

表現・発想などの和化の問題に関して、第72話に現われている普賢菩薩は光空法師の代わりに腹部辺りに多くの矢が立っているとある。観音菩薩とおぼしき普賢菩薩のことを「観音化された普賢像」と呼びたい。第99話では日頃の持経者を保護・防衛・庇護にやってくるとされる阿弥陀仏の役目は明らかに普賢菩薩のそれと重なっているので「普賢化された阿弥陀仏像」と名付けたい。かような『法華経』を含め中国の僧尼伝に未見の和化表現の追及は今後の課題として展開する所存である。

\* 対外経済貿易大学教授

## 富山市八尾町本法寺蔵「法華經曼荼羅図」について (要旨)

原 口 志津子\*

本講演では、富山市八尾町(旧・婦負郡八尾町)の長松山本法寺の蔵する「法華經曼荼羅図」についての紹介を行い、日本中世における『法華經』受容の一端を明らかにした。

本作は以下のような特徴をもっている。

- ① 法華經二十八品の内容すべてを描く説話絵で「法華經変相」とよぶべきものである。
- ② 22幅の連作掛幅であり、かつそれぞれが縦約190cm、横約127cmの大幅である。
- ③ 所蔵寺院・本法寺は、新潟県三条市・長久山本成寺を総本山とする法華宗(陣門流)別院だが、本作は海底より出現との伝承がある。
- ④ 画中に嘉暦元年から3年(1326~1328)の制作年が明記されている。
- ⑤ 「古表具裏書」等により修復、補作の事情が明らかである。明応6年(1497)、寛文12年(1672)、昭和41年(1966)(各々完成年)に大修復が行われている。また延宝7年(1679)に富山藩第二代藩主前田正甫が、序品を補作させている。
- ⑥ 明治33年(1900)に国宝指定、昭和25年(1950)に21幅が重要文化財指定、第一幅序品のみ富山市指定文化財となっている。
- ⑦ 毎年8月6日に風入法要が行われる。
- ⑧ 22幅のうち13幅が迹門にあてられており、迹門重視である。
- ⑨ 図像、構成の点で前代の大画面絵画を継承する。ただし、画風は水墨画の技法も加味した鎌倉時代末期の様式である。
- ⑩ 第一幅を除くすべてに「勸進僧浄信」の記名がある。講演者は、元徳3年(1331)には播磨国福泊津の勸進上人で福泊嶋の関務を取り仕切った律僧であり、暦応3年(1340)時には法勝寺末寺・一条戻橋寺恩徳院の長老である人物と推測してい

る。

- ⑪ 『法華經』本文のみならず、『妙法蓮華經文句』等の注釈書に典拠をもつ図像がある。
- ⑫ 和文化された『法華經』経釈を反映した図像がある。『草案集』『花文集』等に跡をとどめる音声世界の豊かな所産であり、後代の『釈迦の本地』、『法華直談書』にも関係する図像がある。
- ⑬ 制作者の属する集団あるいは当時の世相を反映する図像がある。

本講演では、以上の説明の後、まず第12幅「妙法蓮華經提婆達多品第十二」中の『法華經』本説にはない折檻する仙人の図像を解説した。山崎誠<sup>1)</sup>、本井牧子<sup>2)</sup>の研究により『草案集』第五巻、『花文集』第三提婆品に由来する図像であることが確認できる。

次いで、第6幅「妙法蓮華經授記品第六」の摩訶迦葉の前世として語られる菜を摘む女と第12幅「妙法蓮華經提婆達多品第十二」の「変成男子」の図像について考察を行った<sup>3)</sup>。

最後に、賽の河原の先駆的図像や湯屋の図像、鹿狩りの図像を取り上げ、補筆補彩の問題と図像解釈における図像学的コード(服飾や庭園図像、画面における位置関係など)に触れた。

(1) 山崎誠「草案集とその研究」(『国文学研究資料館紀要』第31号、2005年)

(2) 本井牧子『『釈迦の本地』とその淵源—『法華經』の仙人給仕をめぐる』(石川透編『中世文学隣接諸学9 中世の物語と絵画』(竹林舎、2013年))

(3) 拙稿「本法寺所蔵『法華經曼荼羅』と女性の信仰—一芹を摘む女と変成男子—」(佐野みどり・加須屋誠・藤原重雄編『中世絵画のマトリックスII』青簡舎、2014年)

\*富山県立大学教授